

ミシガン大学の日本研究

E. ラミレス＝クリステンセン（ミシガン大学）

ミシガン大学はコロンビア大学のように有名な研究者はいないものの、本学における日本語教育と研究はかなり長い伝統をもっています。その中で日本研究センターは、ミシガンにおける日本研究者の活動をコーディネートする役割を果たしています。

センターは1947年に日本に関する研究と教育を専門に行うことを目的として発足しました。教授陣は人文科学や社会科学、その他の専門分野から、広く集められ、過去および現在の日本の研究をしています。その目指す所は、日本に関する知識の根本的なものであって、その知識を学生や研究者のみならず、経済界や産業界、政府や一般大衆にも広げることです。

本学では1936年から日本語の授業が続いており、現在では日本関係の授業数は約70科目を数え、それらに登録する学生数は700名を越えています。センターの設立以来、日本研究専攻生と日本をテーマに研究した他学部生を合わせて500名に修士号が与えられ、博士号も日本関係分野で100名に授与されました。

1983年には新たに経営学部との間で、修士課程とM. B. A.のための共同プログラムが開始されました。これはミシガン大学の日本関係のジョイント・プログラムの中で、一番人気をよんでいるものであります。研究については、センターは援助が主要な役割で、多くの研究者が個人レベルでセンターの資金的援助を受けつつ、研究を進めています。

最近では、センターは日米自動車会議を開催し、広く日米の社会科学系・工学系の学者の参加をみました。この催しはトヨタ・日産・ジェネラルモーターズ・フォード・UAW という自動車労働組合連合・米国の部品供給会社などの援助で可能になったものです。

また、日本に関する知識を普及するために、ミシガン大学は出版も行っています。1951年以來同センターの日本語教材文献目録、日本語学習用参考論文集などは、米国の日本研究の進展に計り知れない貢献をしてきました。最近他大学の専門的な出版部には、日本に関する学術的・専門的一辺倒な本を出版しない傾向が現れていますが、このような状態の中でミシガン大学の出版部は相変わらず専門的な書物を出そうという意欲を見せています。

研究資料については、1948年に設立されたミシガン大学の図書館があり、この中の日本語文献コレクションは、19万2000点を数え、他にも多数の定期刊行物や資料を所蔵しています。

このコレクションは米国において、ハーバード大学の図書館に次ぐ地位にあると思われます。最近とくに経済界から日本の技術、日本の産業についても資料の要求があるので、これからはその方面の資料の収集をする予定です。資金はもちろん問題ですが、ミシガン大学はアジア研究の長い伝統に、強い自負心を持っているので、毎年アジア図書館に与える予算が増えているのが現状です。

一般向けサービスはセンターの活動の一部分で、大学美術館が催す展覧会には毎回多数の地域住民が足を運び、常時、北米の多数の美術館を巡回して展覧会を行っています。また、毎年夏にはアジア研究センターが米国中西部の教育関係者を対象に、アジア関係教員夏期セミナーを主催しています。これは一般教養の教員たちを呼んで、日本についての教

育を与えるという、毎年夏に行われている特別のゼミであります。

さらに日本研究センターは、毎週開かれる座談会、評判の高い日本映画シリーズなどの他にも、大学関係者や市民を対象にした、市民講座も主催しています。近年センターはサービスを産業界にも拡大し、指導者教育セミナー、毎年の日米自動車産業会議、輸出産業調査、国際自動車産業フォーラムという、米国中西部の教育関係者対象の、市民セミナーなども開催しています。

ミシガン大学における日本研究の現状については、本学の日本研究は基本的には人文科学や社会科学の諸分野にわたる教授陣の個人研究を柱に行われています。教育と並んで、研究は教員の重要な役割であり、大学では学内外の援助金・連邦政府基金などの申請業務を専門にするスタッフを配置しています。また日本研究センターでも個人研究の準備金や研究諸段階の援助金の支給、そして国内外の日本研究者との共同研究の運営などもおこなっています。

ミシガン大学では早くから日本文学研究が盛んでしたが、それは二週間ばかり前に亡くなられた和歌と歌論の研究で有名なロバート・ブラウー (Robert Brower) 先生によるところが大であります。プリンストン大学のアール・マイナー (Earl Miner) 教授との共著で、1961年に出版された、和歌の批評的文学史についての先生の本は、西洋諸国における日本古典研究を飛躍的に高めた先駆的業績であり、今日でも西洋語で書かれた和歌研究書の中で、これを凌ぐものはないと思われま

す。ミシガン大学在職中にブラウー先生のもとで、日本古典文学の指導を受け、巣立っていった研究者が現在米国内外の多数の大学で、その伝統を受け継いで教壇に立っています。

現在本学には日本文学の専門家が三人おります。日本研究センター所

長を兼任するロバート・ダンリー（Robert Danly）教授は江戸および明治期が専門で、1982年に樋口一葉に関する著作でアメリカン・ブック賞の翻訳部門賞を獲得しています。現在先生は井原西鶴研究を執筆中であり、その第一、二巻は『好色一代女』と『世間胸算用』の翻訳、第三巻は『西鶴と日本大衆文芸におけるリアリズムの誕生』と題されます。これは西鶴に関する英語の最初の批評的作品であるだけでなく、元禄期が文化的にリアリズム誕生の温床となったとして、ちょうど英文学におけるイアン・ワット著の『小説の誕生』に匹敵する研究を意図するものです。

もう一人の文学専門の教授は、ケン・イトウ（Ken Ito）という助教授で、現代文学を専門とし、谷崎潤一郎論を書いております。谷崎の空想力の地理といますか、その中で西洋と中国が果たした役割に重点をおいて研究を進めています。

そして私ですが、私は平安・中世時代の分野で研究をしています。特に室町期の連歌師、心敬に関する研究で、連歌論を仏教哲学と西洋の構造主義、および解体批評の視座から分析するという作業も続けています。

この他に日本語の言語学が専門である、ポリリー・ザトラウスキー（Polly Szatrowski）という助教授がおり、ミシガン大学の日本語教育の陣頭指揮を取っています。ディスコース分析と社会言語学にまたがる分野で、現在日本語のサジェスションやリクエストなどの、表現にまつわる意思伝達上の研究をおこなっています。

ミシガン大学の仏教研究は、昨年教授ポストを二人分増やしたことで教授陣が三人となり、今後の大きな発展が予想されます。アジア言語文化学部長を兼任するルイス・ゴメス（Luis Gomez）教授は敦煌及びチベ

ットの初期禅宗史に関する著作があり、更にアメリカの禅センターがどのように禅寺の戒律を取り入れているかについて研究中です。同教授のかつての学生であったグリフィス・フォーク (Griffith Foulk) は京大人文科学研究所と駒沢大学に遊学の後現職につきました。目下その制度的儀礼的構造の歴史的発展という点から日本の禅をとらえ、同時に江戸時代以降の文献に見られる各宗派の清規としての歴史的影響を考慮した大規模な日本禅史を執筆中です。

日本史の教授陣は二人を擁しています。ロジャー・ハケット (Roger Hackett) 教授は、目下、日本の近代化において軍部の果たした役割を中心に研究を進めており、また殿村ひとみ教授は、現在取り組んでいる室町期の村落と商取引に関する研究において、中部日本における「惣」に見られる共同体形成過程・経済支配形態・所有関係等のパターンを追求中です。殿村教授の用いている資料は、対象地域の村民自らによって書かれ、神社等に保管されてきた書類であるため、同教授は人類学で用いられる中心場と地域システムの理論を援用しています。

人類学では東アジアを専門とする教授を二人擁しています。カール・ハッターラー (Karl Hutterer) 教授は先史時代が専門、ウォルター・エドワーズ (Walter Edwards) 教授は象徴人類学が専門です。エドワーズ教授の最近の研究は、日本の家制度が日本人の家族生活及び社会生活の底にある価値観や、個人の問題、社会の中における個人の位置、家族形態の理想像等を反映したものであることを裏づけようとするものです。

ロバート・コール (Robert Cole) 教授は、社会学と経済学の両分野にまたがる活動で著名です。現在の研究テーマは日米の産業界における「品質」という語の概念の違いについてです。この研究を通して、同教授は日本語の品質という概念がまず一連の企業慣行へと還元され、つい

でそれが逆に高品質の製品を作ろうとする個人の態度になって現れてくる実態を解き明かそうとしています。即ち、職人気質の伝統ゆえではなく、寧ろ人間の行動をより積極的な方向へと仕向ける企業組織の慣行が日本の成功の鍵であったとするものです。

経営学部のウラジーミル・プーチック (Vlasimir Pucik) 教授は、日本企業の国際化をテーマとする三ヵ年計画の国際的研究プロジェクトに参加しています。これはミシガン大学の研究者の他に、東京大学及びロンドン大学経済学部の研究者からなるものです。プーチック教授は特に、日本企業の全世界的規模での優位性に着目し、その原因を会社の組織上及び運営上の慣行に探ろうとしています。更に、同教授は日本式経営法を矛盾なく定義することができれば、それが日本文化独特の現象なのか、あるいは、或る特定の社会的・経済的理由故に案出された一連の実利的且つ合理的手段なのか特定できると見えています。

以上概観してきたところから分かる通り、ミシガン大学の日本研究はそのトピックにおいて、研究の対象において、また方法論において多様極まる観を呈しています。しかしながら反面、或る意味において、それらは共通の関心により統一が保たれているということが出来ます。経営学・社会学の分野、そしていくばくかは人類学の分野においても、明らかに、海外での日本の強力な経済的躍進を挑戦として受け取る姿勢が存在し、このような成功の根源的理由を学者に与えられた学問的枠組みの中で解き明かさんとする熱意が大方の研究者を動かしているのです。同様なことは歴史・仏教・文学・言語学にも言えるのであって、研究者はそれぞれ、書かれた形であれ話された形であれ、テキストと呼ばれる物を対象として扱いつつ、それに何らかの理論的枠組みから読みを与える作業を行っているのです。要するに、分野こそ違え、各人とも或る一つ

の体系を他の体系へと読んで「翻訳」するという作業をしていることに他なりません。

かくの如くミシガン大学における日本研究は極めて活況を呈しています。日本研究センター主催の講演やセミナーを通して、日本に関心を寄せる者は頻繁にお互い同士の日本の「読み」に耳を傾け、意見交換をする機会に恵まれています。そのような研究者間の意見交換の結果として、また研究者個人個人とテキスト或は体系との関わりの結果として、知識の拡大が着実に進んでいます。その知識を一体どう使うのか、それが究極的にいかに力や権力といった問題に結び付いていくのかという問いを発する者もあるかも知れません。けれども、それに答えるには、各個人レベルでの深い思索を待つ他はないでしょう。